

## 投稿

彼らの希望は日本  
の「平和憲法」

『かけはし』一〇月二四日号に「ベトナム派兵を拒否し翻ろうされ続けた二人の脱走兵」というハンギョレ21の九月二六日に出たクオン・ヒョツテさんの論の翻訳が紹介されています。キム・ドンヒ（金東希）およびキム・ジンス（金鎮洙）の二人は、私が関係したベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）も、関連があり、とりわけ北朝鮮に向かったキム・ドンヒの消息に深く憂慮しており、韓国

内でのこの事件への関心はどうかであるのかも気になっていました。今度初めてこの論を知り、ありがたいと思っています。ほとんどの人は、このクオン・ヒョツテ論が事実上添っており、あとに述べるように、細かい点での事実のズレがありますが、「彼らを日本に導いたのは平和憲法の理念だったけれども、彼らを日本の外に追い出したのも平和憲法の現実だった」ということは、まったくその通りでした。彼が日本で発表した「亡命願ひ」には、はっきりと次のように書かれています。

「私が亡命地を日本に選択したのは、もち論地理的条件もありますが、特に私は日本国憲法前文ならびに（第九条）戦争の放棄を規定し平和主義を貫こうと努力している日本国に亡命したのであります」

この韓国軍からの二人に限らず、日本で脱走した米国人の兵士も、すべて彼らの希望は「平和憲法」を持ち、軍隊のない日本に滞在したいという希望ばかりでした。しかし、日米安保条約の制約によって、米国兵も、米軍及び日本警察から逮捕され、米軍裁による有罪処罰になる結果になりま

## ベトナム派兵を拒否した脱走兵、金東希さんの消息について

吉川 勇一

す。脱走兵は日本には安全に存在できず、支援したベ平連はやむをえず、警察の眼から隠しながらスウェーデンなどに送る以外はありませんでした。キム・ジンスの場合は、こうしてスウェーデンに無事送られ、それ以後、同国のレセパツセをもらって日本に三回も入国しています。最近ほ連絡が切れてはいませんが、私も二度、東京でその後の彼と会っています。

自民党政府は  
頑なに亡命拒否

問題はキム・ドンヒのほ

うです。彼が北朝鮮に送られるまでの経過は、かなり明らかです。一九六八年七月に「京都金東希を守る会」が発行し、ベトナムに平和を京都集会和京都大学新聞社が協力した「権利としての亡命を！」——金東希問題を考える——に詳しくあります（一冊、貴紙編集部に寄贈します）。これらの経過から見れば、彼が日本に在住できる資格は十分にあったと思うのですが、日本政府は彼を密入国で逮捕して、長崎県の大村収容所に入れ、韓国への帰国を強制させようとしました。しかし、当時の韓国の

政治状態から、もしも彼が強制送還されれば、生死にもかわるような処罰は確実だと思われました。

ベ平連をはじめ、各地の「金東希を守る会」、在日朝鮮人総連合など団体、とりわけ京都の知識人は、日本への在住を強く要求し、著名運動も行なったのですが、自民党政府は頑なにこれを拒否し、韓国への強制帰国を主張したのです。力足らず、運動は日本への在住が困難だと判断せざるを得なくなつたのです。この段階で、キム・ドンヒ青年は「日本での亡命がどうしても許されないのなら、北朝鮮へゆきたい」と願うようになってはいました。しかし、政府、法務省は、彼の北朝鮮送りを事前に明らかにせず、関係者にはまったく知らせないまま、突然ソ連船に乗せて北朝鮮に送らせたのです。私たちは、積極的に北朝鮮への送りを運動しようと

したのではなく、韓国への強制送還を何としても阻止しようとする点でした。

しかし、いずれにせよ、彼が北朝鮮に送られ、最初は愛国者の「帰還」と大歓迎の集会なども行われながら、その後一切の情報がなくなり、「処刑」されたという話までが出てきて、私たちは驚きました。一九七六年一〇月、金日成に小田実さんが会つた時に状況を尋ねた時も、現状不明の返事が送られたのです（小田実『ベ平連』回顧でない回顧）一九九五年第三書館160〜161ページ）。

## 元「ベ平連」が 知り得た事実

クオン・ヒョツテさんが最後に「キム・ドンヒとキム・ジンス、二人を探したい。そして公的な歴史によって隠された『影の歴史』に出合つて見たい」と

書かれています。とりわけ、キム・ドンヒについては、彼の北朝鮮送りに間接にせよ、関連を持った私たち（元ベ平連のメンバー）は、この事情を明らかにしたいと、強く望んでいます。

なお、クオン・ヒョツテさんの文の中で、キム・ジンスは「結局、彼はキューバ大使館をこっそり抜け出し当時、米軍脱走兵を支援していたベ平連の助けを得て、ソ連経由でスウェーデンに亡命する」とあります。確かに、キューバ大使館に庇護を依頼して、一九六七年四月からそこにいた彼は、六七年暮にこっそり抜け出し、総評に連絡した後、最後はベ平連に連絡にくるのですが、その時、私たちは、大使館に一切連絡せずに抜け出したことを批判し、まずキューバ大使館に連絡をする必要があると説得しました。大使館はそれまでとても心配していたのですが、わかつた大使館はホツと思ひ、キム・ジンスはまたキューバ大使館に戻ることになります。その上で、あらためて六八年一月始めにキューバ大使館に出たいとの申し届けをした上で、館から出ることにになります。大使館は、それから、四八時間は発表をせずしておくので、その間に安全なところに移すようにと言います。キム・ジンスは、再度、ベ平連に連絡に来て、それからベ平連は彼を庇護することにし、作家の堀田善衛さんの自宅に匿われるなど（堀田善衛『橋上幻像』一九七〇年新潮社刊）のあと、最後はスウェーデンに送ることになります。この間の詳しい経過は、関谷滋・坂元良江編『となりに脱走兵がいた時代』（一九九八年、思想の科学社刊）38〜49ページ）にあります。

（よしかわ・ゆういち 元「ベ平連」事務局長）